

## 日本山岳会 100 年のあゆみ

### 日本の登山と日本山岳会の起こり

日本山岳会の創立に関しては、1905（明治 38）年 10 月 14 日、東京飯田橋の富士見楼という料亭で設立に関する最終的な打ち合わせがなされたといわれており、この日が「日本山岳会の設立の日」とされている。

その創立は、間接的にはイギリスの宣教師ウォルター・ウェストンと、地理学者志賀重昂の教示と影響により、直接的には小島烏水、越後の豪農高頭仁兵衛、日本博物学同志会の武田久吉、河田黙、梅澤親光、高野鷹蔵、山草会の城数馬らの熱心な運動により、この 7 人が発起人となり、山岳会が発足し、翌 1906 年 4 月機関誌『山岳』を発行した。

日本における山登りは、古来から宗教的登山として行われていた。それはヨーロッパ・アルプスにおける登山が、18 世紀から始まったのに比べて遥かに古い。しかし山登りそれ自体を楽しむという、いわゆる近代登山の精神が移入されたのは明治中葉以降であり、これはウェストン師の影響が強い。

日本の近代登山史を一瞥すると、「探検登山時代」「積雪期登山時代」「スポーツ登山時代」そして「海外登山・ヒマラヤ時代」と大別出来るであろう。

志賀重昂は 1894 年に『日本風景論』を出版し、「登山の気風を作興すべし」と力説した。またウェストン師は、1888 年の来日以来 1894 年までの第一回滞在の間に、飛騨山脈、赤石山脈を登り、ロンドンで『日本アルプスの登山と探検』を出版した。

この書物をなかだちとして小島烏水はウェストン師と知り合い、イギリス山岳会にならって日本山岳会創立のはこびに至ったのである。

日清、日露戦争の勝利により青年の間に探検の

精神が高まっていたやさきだけに、山岳会の設立により登山熱は非常な勢いで広まっていった。

### 日本の探検登山時代

日本山岳会の設立前後から大正の初めの探検登山時代に日本の高峰はほとんど登り尽くされた。

日本アルプス探検の黄金時代といわれる 1909 年夏には、吉田孫四郎らの越中劔岳登山、鶴殿正雄の穂高・槍初縦走、烏水の赤石山脈縦横断など、画期的な記録が残されている。

1911 年 1 月、オーストリアのレルヒ少佐によって招来されたスキー術は、急速な勢いで、本州では高田を、北海道では札幌を中心として広まり、これまで旅の延長とみられた夏山中心の登山や方法を一変させ、1913（大正 2）年 1 月には鶴見大尉一行が早くも富士山のスキー登山を行い反響を呼んだ。

明治末期から大正初期にかけヨーロッパのアルプスに遊んだ加賀正太郎、鹿子木員信、辻村伊助らの紀行が日本の登山界に大きな刺激を与え、また 1919 年から 1921 年スイスの山々で本格的な登山を行い、アイガー東山稜の初登攀に成功した槇有恒の帰国を迎え、日本の若い学生登山者の間に、ピッケル、ザイル、シュタイクアイゼンなどを駆使したアルプス的な登山が、槍、穂高、劔岳を舞台に始められた。

槍ヶ岳の北鎌尾根、小槍、前穂高北尾根、北穂高滝谷、劔岳八ツ峰などの新しい岩場が相次いで登られ、続いて積雪期における日本アルプスの登山に新しい分野を提供した。

また、上越や奥秩父の山々が開拓され、未知であった黒部峡谷が冠松次郎一行により探られたのもこの時代である。

### 本格的海外登山の始まり

この間登山界は次第に大きな変化をとげ、日本

最初の本格的な海外登山として、1925年慶応大山岳部OB、学習院大山岳部OBによる日本山岳会登山隊（榎有恒、橋本静一、早川種三、岡部長量、波多野正信、三田幸夫）はカナディアン・ロッキーの未登峰アルバータ（3619m）遠征を行い、1936（昭和11）年には立教大隊（隊長堀田弥一）がガルワル・ヒマラヤのナンダコート（6867m）を極めた。

戦後、国力の回復とともに海外登山は一段と盛んになり、1952年早稲田大学隊は南半球の最高峰アコンカグア（6959m）登頂に成功し、また日本山岳会自体の事業として、1952年からマナスル登山を開始し、1956年世界第9位の巨峰（8125m）に初登頂した。これらの登山のほとんどは日本山岳会会員によってなされたものである。

#### クラブルームの変遷と登山界の動き

日本山岳会は1931（昭和6）年に至り初めて会長制度を設け、小島久太（烏水）が初代会長に推された。

山岳会事務所は創立以来幹事個人の居宅を転々としていたが、1929年虎ノ門不二屋ビルに図書室兼クラブルームを新設したのを機に、1933年には事務所も虎ノ門に置くこととなった。

また、1930年から「山日記」、「会報」（現在の「山」）を発行し、1941年1月に社団法人に組織替えをした。

しかし、1945年5月の空襲によって虎ノ門のクラブルームおよび図書室は、万卷の貴重な図書とともに灰燼に帰ってしまったことは残念である。

戦後の日本山岳会は、従来のクラブライフと機関誌発行に重点を置いていた性格の改革に迫られ、1946年日本体育協会に加盟し、越後を皮切りに各地に支部を設けていく。1960年には、本会と全日本岳連とで、日本山岳協会（武田久吉会長）を設立する。

事務所は1946年にお茶の水協内に置いたが、体協敷地内にクラブルームを新築したのは1949年3月であった。その後体育協会の代々木移転とともに、クラブルームも1964年7月外苑コー

ポに移った。

その後、1967年6月神田錦町の向井ビル5階、1973年5月に湯島のさくらビル7階にクラブルームを移したが、1978年1月、現在の「サンビュウハイツ四番町」の一角を購入してクラブルームとした。それまではすべて賃借であったが、現在のルームは会の資産となっている。

また1961年には上高地に山荘を持ち、1973年に新築して「山岳研究所」となり、宿泊などで会員の便をはかってきた。それも厳しい風雪の中で老朽化が進み、1993（平成5）年に新しい山岳研究所が新設されることになる。

#### 戦後の海外登山の隆盛

本会は日本を代表する登山団体として、イギリスをはじめ世界各国の山岳会との交流も盛んで、各国山岳人の往来も活発に行われ、さらに近年は友好諸外国との交流登山も積極的に行われつつある。

1956（昭和31）年のマナスル以後、日本の岳人は、国内はもとよりヨーロッパ、ヒマラヤ等世界の各地でその実力を発揮し、多くの記録を作り始めた。

そのなかで、日本山岳会では1970年に世界最高峰エベレストに登頂した。また同じ年に、マカルー峰に東南稜ルートより登頂している。そして1980年、中国側からエベレスト（チョモランマ）に北東稜からの登頂と北壁の初登攀をなし遂げたのである。

このチョモランマ登山を機に、「学生達に中国の山を登ってもらおう」と、1981年から5年間、日本山岳会学生部の名前で中国登山協会からボゴダ峰登山の許可を取得し、81・82年は東京、83年は関西支部、84年東海支部を中心として計画が進められ、5年目の1985年は、「日本山岳会創立80周年海外登山」としてボゴダ山群の他にキレン山群、コンロン山群、また黄河源流のトレッキングなどを加えて三隊の登山隊が中国に向かった。

この他80周年行事の一環として、2つの海外登山が行われた。

春にはカンチェンジュンガ登山隊を派遣。南峰(8491m)、中央峰(8478m)、主峰(8598m)の8000mの縦走に成功し、また8000mの附近よりハングライダーを飛ばすなどのユニークな登山隊となった。秋には、東海支部がガウリサンカール(7145m)の登頂に成功した。

1985年8月24日、東京・目白の椿山荘に、秩父宮妃殿下、関係各国大使等の招待客をお迎えし、460名の出席による「日本山岳会創立80周年記念晩餐会」が盛大に開催された。

また、支部交流、会員交流の会運営方針の一つの節として、大阪、名古屋、福岡、仙台、長岡、札幌、富山の七都市でも創立80周年を祝う式典、晩餐会、記念山行が行われた。

1988年春、チョモランマ=サガルマタ(エベレスト8848m)三国友好登山が行われ、登山隊を中国とネパールの両側に分けて頂上を目指し、登頂後はお互いに反対側に国境を超えて下山する交差縦走を成功させた。

1992(平成4)年10月30日、日中合同登山隊(日本山岳会、中国登山協会)により、世界最高の未登峰であったナムチャバルワ(7782m)の初登頂を成し遂げた。

### 会員数6000名を超える

1993年4月、上高地の山岳研究所を改築し、翌年9月、会員の増加、事業活動の発展に伴い手狭になった本会ルームを拡張するとともに、全面改装を行った。

1995年5月21日、創立90周年記念事業の一環として、マカルー峰(8463m)東稜からの登頂に成功した。

同年10月14日に新高輪プリンスホテルにおいて、創立90周年記念式典・晩餐会等が行われ、全国から会員720名が参加した。なおこれと前後して全国8ブロックで、式典、講演会等を行った。

1998年5月、秩父宮家よりの御遺贈金を基に秩父宮記念山岳賞を創設。2005年までの間に、「山」に関して功績のあった7名の方々に表彰を

行った。

2000年5月、上高地山岳研究所ミニ水力発電装置完工式が行われ、運転が開始された。

20世紀、会員数は伸び続け、2001年には、6000名を超える会となった。

この年、世界の山岳界に向けて英文の「Japanese Alpine News」が創刊された。

1996年8月には、青年部が南々東リブよりK2(8611m)登頂に成功し、1998年5月にも同じく青年部の隊が、カンチェンジュンガ峰(8586m)の北面より無酸素登頂に成功した。

これ以後、1999年に西ヒマラヤのウムドンカンリ峰(6643m)、ダウン峰(6200m)に東海支部インドヒマラヤ登山隊が初登頂をしたのをはじめ、2002年の「国際山岳年」には記念登山として「日印合同東カラコルム踏査・パドマナブ登山隊」と「日・中友好チョー・オユー女子合同登山隊」の2隊を派遣。いずれも成功裡に終わった。

また創立100周年記念事業の一環として、2004年に関西支部がパチュムハム(6529m)およびギャンゾン・カン峰(6123m)南東壁に初登頂した。同年学生部がチブ・ヒマール(6650m)に、2005年には東海支部がパカシ・ラムール川周辺の二峰に初登頂した。2003年の東海支部の冬期ローツェ南壁登攀は惜しくも敗退したが、2006年12月に初完登を果たしている。

同じく100周年記念事業としては、十数年に及ぶ歳月をかけて編纂された『百年史』の刊行。3年余の歳月と延べ6000名近いの参加者によって、全長約5000kmを完踏した中央分水嶺踏査。また『新日本山岳誌』の発行やシンポジウム、記念フォーラムなどが行われた。

10月15日には創立100周年記念式典・祝賀晩餐会が新高輪プリンスホテル「飛天」において開催され、皇太子殿下をはじめ、国内外の来賓51名をお迎えし、総勢977名の出席を得て、盛大に挙行された。また、全国8会場でのブロック別式典が華々しく挙行された。